## 地表面におけるS波の反射の一例

本 間 正 作\*

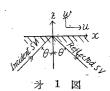
## §1. 題 意

地震波の地表面における反射については古くから多くの人により論ぜられ、松沢先生 $^{(1)}$ の数値的計算もあるから、ほとんど総て解決しているように思われるが、ここでは SV 波が大きい入射角で入射した時の全反射の現象について 補足をいたしたい。この 場合の反射 P 波は表面振動の形となり、SV 波だけが反射され、その振巾は入射波のものに等しいが 位相に差が生ずることが分つている。所でこれらの計算は大てい無限に続く正弦波が入射した時であるから、実際のように衝撃的の SV 波が入射した時はどういうことになるか調べてみる。

## §2. 基本の式

すでに分つていることであるが説明の都合上全反射の場合の式を導いておく。

地表上にx 軸をとb, z 軸を鉛直上方にとb z<0 を地中とする。SV 波の波線はxz 面内にあb入射角(鉛直線と波線の角)を $\theta$  とする。波は変位ポテンシアルから導れ、S 成分の $\psi$ , p 成分のを $\phi$  とすると変位のx, z 成分u, w は



$$u = \frac{\partial \phi}{\partial x} + \frac{\partial \psi}{\partial z}, \qquad w = \frac{\partial \phi}{\partial z} - \frac{\partial \psi}{\partial x}$$
 (1)

となる。そして

$$\psi_0 = \frac{1}{p} e^{i p(t - \alpha x - \beta z - \epsilon)}, \qquad (入射 SV)$$

$$\psi_1 = \frac{A}{p} e^{i p(t - \alpha x + \beta z - \epsilon)}, \qquad (反射 SV)$$

$$\phi = \frac{B}{p} e^{i p(t - \alpha x - \epsilon) + \eta k z} \qquad (P 成分)$$

とおける。たゞし A, B, p,  $\varepsilon$  は常数で, P 波, S 波の速度を V,  $\mathfrak V$  とする時

$$\alpha = \frac{\sin \theta}{V}, \quad \beta = \frac{\cos \theta}{\mathfrak{B}}, \quad k = \frac{1}{\mathfrak{B}} \sqrt{\sin^2 \theta - \left(\frac{\mathfrak{B}}{V}\right)^2}$$
 (3)

で p>0 なら k の根号は正とする(2)。 そして

$$\sin \theta > \mathfrak{B}/V$$
 (4)

<sup>\*</sup> 松代地震觀測所

<sup>(1)</sup> 松澤武雄「平面波の表面反射の一例」地震 4 卷 3 號 (昭和 7 年) 125-139.

<sup>(2)</sup> 以下いつでも p>0 とする。p<0 の時は以下の計算が少し變る。

の場合を考える。z=0 で  $Z_z=\lambda\left(\frac{\partial u}{\partial x}+\frac{\partial w}{\partial z}\right)$  及び  $X_z=\mu\left(\frac{\partial w}{\partial x}+\frac{\partial u}{\partial z}\right)$  が 0 である 条件から A, B が決り,

$$A = \frac{-(\alpha^2 - \beta^2)^2 - 4i\alpha^2\beta k}{(\alpha^2 - \beta^2)^2 - 4i\alpha^2\beta k}, \qquad B = -\frac{4\alpha\beta(\alpha^2 - \beta^2)}{(\alpha^2 - \beta^2)^2 - 4i\alpha^2\beta k}$$
(5)

これらを(2) に代入し、それから(1) によりu、w を求め、全部虚数部分をとると

$$\begin{aligned} u_0 \\ w_0 \end{aligned} &= -\beta \\ \alpha \end{aligned} \cos p(t - \alpha x - \beta z - \mathcal{E}), \tag{6}$$

$$\begin{aligned} u^1 \\ w_1 \end{aligned} &= \frac{\beta}{\alpha} \bigg| \cos \left\{ p(t - \alpha x + \beta z - \mathcal{E}) \sigma \right\}, \\ &= -\beta \bigg| \bigg\{ \frac{(\alpha^2 - \beta^2)^4 - 16\alpha^4 \beta^2 k^2}{\Delta} \cos p(t - \alpha x + \beta z - \mathcal{E}) \\ &- \frac{8\alpha^2 \beta k (\dot{\alpha}^2 - \beta^2)^2}{\Delta} \sin p(t - \alpha x + \beta z - \mathcal{E}) \bigg\}, \tag{7} \end{aligned}$$

$$u_2 = \frac{4\alpha^2 \beta (\alpha^2 - \beta^2)}{\sqrt{\Delta}} e^{\eta k z} \cos \left\{ p(t - \alpha x - \mathcal{E}) + \sigma' \right\},$$

$$= \bigg\{ \frac{4\alpha^2 \beta (\alpha^2 - \beta^2)}{\Delta} \cos p(t - \alpha x - \mathcal{E}) - \frac{16\alpha^4 \beta^2 k (\alpha^2 - \beta^2)}{\Delta} \sin p(t - \alpha x - \mathcal{E}) \bigg\} e^{\eta k z}, \tag{8} \end{aligned}$$

$$w_2 = -\frac{4\alpha \beta k (\alpha^2 - \beta^2)}{\Delta} e^{\eta k z} \sin \left\{ p(t - \alpha x - \mathcal{E}) + \sigma' \right\},$$

$$= -\left\{ \frac{16\alpha^3 \beta^2 k^2 (\alpha^2 - \beta^2)}{\Delta} \cos p(t - \alpha x - \mathcal{E}) + \frac{4\alpha \beta k (\alpha^2 - \beta^2)^3}{\Delta} \cos p(t - \alpha x - \mathcal{E}) \right\} e^{\eta k z} \tag{9}$$

$$U = \frac{2\beta (\alpha^2 + \beta^2) (\alpha^2 - \beta^2)^3}{\Delta} \cos p(t - \alpha x - \mathcal{E}) - \frac{8\alpha^2 \beta^2 k (\alpha^2 + \beta^2) (\alpha^2 - \beta^2)}{\Delta} \sin p(t - \alpha x - \mathcal{E}), \tag{10}$$

$$W = \frac{16\alpha^3 \beta^2 k^2 (\alpha^2 + \beta^2)}{\Delta} \cos p(t - \alpha x - \mathcal{E}) + \frac{4\alpha\beta k (\alpha^2 + \beta^2) (\alpha - \beta^2)^2}{\Delta} \sin p(t - \alpha x - \mathcal{E}), \tag{10}$$

ここで

$$\Delta = (\alpha^2 - \beta^2)^4 + 16\alpha^4\beta^2k^2$$

 $\sigma$ ,  $\sigma$ 'は为2図に示す正の角でその値は为1表に示してある。U, W は地表の一点の運動の成分で

в		σ		σ'	cosσ	cos σ		θ		σ ,		σ'		cos σ	
· 35	16'	173° 05		3° 28′	-0.991	7	55	00	14	54		82	33	0.967	0
	30	114 18		32 - 51	-0.411	. 7	60	00	28	58		75	31	0.875	0
	46	89 38	1 4	15 11	0.006	173	65	00	46	08		66	56	0.692	9
36	.00	75 32		52 <b>1</b> 4	0.250	0	68	00	57	56		61	02	0.530	· 7
	30	55 24	(	32 18	0.567	8	70	00	66	28	1	56	46	0.399	3
37	00	42 16	(	88 52	0.739	9	72	00 ,	. 75	32	1 .	52	14	0.250	,0
	30	32 54		73 33	0.839	8	74	00	85	08		47	26	0.084	8
38	00	25 48		77 06	0.900	$^{2}$	76	00	95	18	1 .	42	21	-0.092	5
	30	20 19	1 :	9- 50	0.937	8	80	00	117	.20	1 :	31	20	-0.459	4
39	00 -	15 58	8	32 - 01	0.961	4	85	00	147	28		16	16	-0.843	1
40	00	9 38	.   8	5 11	0.985	9	90	00.	180	00	1	0	00	1.000	.0
43	00.	1 08	8	9 26	0.999	8									
45	00	0 00	9	00 00	1.000	0			]						
47	00	0.51	8	9 34	0.999	9								1	,
50	00	. 4 33	8	7 44	0.996	. 9			:						

ある。(7),(8),(9)の右辺のオーの形は位相差で示した解である。

衝撃性の入射波の時には、これらの各式の右辺に $\frac{1}{\pi}f(\varepsilon)$ を乗じた上

 $\frac{0}{(d^2-\beta^2)^2} 4d^2\beta R$ 

でpと $\epsilon$ で Fourier の積分を行えばよいから

$$\begin{aligned} u_0 \\ w_0 \\ \end{aligned} = & \frac{-\beta}{\alpha} \begin{cases} f(t - \alpha x - \beta z), \\ u_1 \\ w_1 \end{aligned} = & \frac{-\beta}{-\alpha} \begin{cases} \frac{(\alpha^2 - \beta^2)^4 - 16\alpha^4 \beta^2 k^2}{\Delta} f(t - \alpha x + \beta z) \\ -\frac{8\alpha^2 \beta k (\alpha^2 - \beta^2)^2}{\pi \Delta} \int_0^{\infty} dp \int_{-\infty}^{\infty} f(\mathcal{E}) \sin p(t - \alpha x + \beta z - \mathcal{E}) d\mathcal{E} \end{cases}, \quad (13) \\ u_2 &= & \frac{4\alpha^2 \beta (\alpha^2 - \beta^2)^3}{\pi \Delta} \int_0^{\infty} e^{ipkx} dp \int_{-\infty}^{\infty} f(\mathcal{E}) \cos p(t - \alpha x - \mathcal{E}) d\mathcal{E} \\ &- & \frac{16\alpha^4 \beta^2 k (\alpha^2 - \beta^2)}{\pi \Delta} \int_0^{\infty} e^{ipkx} dp \int_{-\infty}^{\infty} f(\mathcal{E}) \sin p(t - \alpha x - \mathcal{E}) d\mathcal{E}, \quad (14) \\ w_2 &= & \frac{-16\alpha^3 \beta^2 k^2 (\alpha^2 - \beta^2)}{\pi \Delta} \int_0^{\infty} e^{ipkx} dp \int_{-\infty}^{\infty} f(\mathcal{E}) \cos p(t - \alpha x - \mathcal{E}) d\mathcal{E} \\ &- & \frac{4\alpha \beta k (\alpha^2 - \beta^2)^3}{\pi \Delta} \int_0^{\infty} e^{ipkx} dp \int_{-\infty}^{\infty} f(\mathcal{E}) \sin p(t - \alpha x - \mathcal{E}) d\mathcal{E}, \quad (15) \\ U &= & \frac{2\beta (\alpha^2 + \beta^2) (\alpha^2 - \beta^2)^3}{\Delta} f(t - \alpha x) \\ &- & \frac{8\alpha^2 \beta^2 k (\alpha^2 + \beta^2) (\alpha^2 - \beta^2)}{\pi \Delta} \int_0^{\infty} dp \int_{-\infty}^{\infty} f(\mathcal{E}) \sin p(t - \alpha x - \mathcal{E}) d\mathcal{E}, \quad (16) \\ W &= & \frac{16\alpha^3 \beta^2 k^2 (\alpha^2 + \beta^2)}{\Delta} f(t - \alpha x) \end{aligned}$$

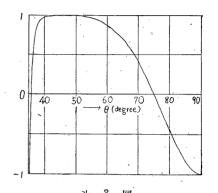
$$+\frac{4\alpha \beta k(\alpha^2+\beta^2)(\alpha^2-\beta^2)^2}{\pi \Delta} \int_0^\infty dp \int_{-\infty}^\infty f(\varepsilon) \sin p(t-\alpha x-\varepsilon) d\varepsilon. \tag{17}$$

## § 3. 說 明

無限に連続した SV 波が入射した時の 反射 SV 波は單に位相が  $\sigma$  ずれるだけであるが、この  $\sigma$  が波長に関係なく入射角だけの函数であることによつて、一般波形の SV 波が入射した時の現象では全く違つた結果が生れる。

反射 SV 波はその一部分だけが入射波と同じ波形を持つ。 その部分の振巾は入射波の振巾の  $\frac{(\alpha^2-\beta^2)^4-16\alpha^4\beta^2k^2}{\Delta}$   $\times\sqrt{\alpha^2+\beta^2}=\cos\sigma$  倍になる。この値は分 1 表及び 分 3 図と分4図に示してある。この値が正なら波の進行方向に対して振動の向きが入射波と反射波で反対になつているわけである。

地表の運動についても入射波をある一点で見た時の振動 と同じ時間的経過を持つ部分と、しからざる部分とがある。 後者の振動の時間的経過は、入射波と異型の反射 SV 波を ある一地点で見ている時の時間的経過と同じになる。



**沙 4 区** 

入射波と異型の反射 SV 波及び地表振動とそれから P 成分(これは深さと共に減衰する)は一般に入射波が到着する以前から発生している。

これらの事は一例を以て示せば最も分りやすい。 かを正の値として、入射波を

$$f(t-\alpha x-\beta z) = \begin{cases} 1, & 1 \geq m(t-\alpha x-\beta z) \geq -1, \\ 0, & |m(t-\alpha x-\beta z)| > 1, \end{cases}$$
(18)

で与える。そうすると簡單な計算により

$$\int_{0}^{\infty} e^{-ns} dp \int_{-\infty}^{\infty} f(\mathcal{E}) \cos p(\tau - \mathcal{E}) d\mathcal{E} = \operatorname{tg}^{-1} \frac{m\tau + 1}{ms} - \operatorname{tg}^{-1} \frac{m\tau - 1}{ms}$$
(19)

$$\int_0^\infty e^{-vs} dp \int_{-\infty}^\infty f(\xi) \sin p(\tau - \xi) d\xi = \log \sqrt{\frac{(ms)^2 + (m\tau + 1)^2}{(ms)^2 + (m\tau - 1)^2}}$$
 (20)

となることが分る。 たゞし  $\operatorname{tg}^{-1}$  は  $-\pi/2$  と  $\pi/2$  の 間の 値をとる。 s=0 又は -kz,  $\tau=t-\alpha x$   $+\beta z$  又は  $t-\alpha x$  にすると  $(13)\sim(17)$  の右辺の各積分が求まる。

特に z=0 したがつて s=0 の時には

$$gt^{-1}\frac{m\tau+1}{ms}-tg^{-1}\frac{m\tau-1}{ms} = \begin{cases} 0 & m\tau > 1\\ \pi & 1 > m\tau > -1\\ 0 & -1 > m\tau \end{cases}$$

であるから P 成分の前半部も入射波と同じ振動形式になる。しかし $\tau$  の値にかいわらずこの値が0 になる区間は  $s \neq 0$  の時には存在しない。

この成分がどのように地中に拡がつているかは次のようにして分る。

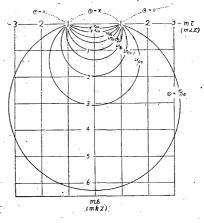
$$tg^{-1}\frac{m\tau+1}{ms}-tg^{-1}\frac{m\tau-1}{ms}=tg^{-1}\frac{2ms}{(ms)^2+(mt)^2-1}=\Theta$$

とおくと

$$(ms - \text{ctg }\Theta)^2 + (m\tau)^2 = 1 + \text{ctg}^2 \Theta$$

 $\Theta$  の色々の値に対して ms と  $m\tau$  はau5 図のような円周上の点として与えられる。たとえば t=0 における地中の等振巾面は mkz と  $-m\alpha x$  がこの円群上の点にあるわけである。それゆえ振巾の小さい運動なら t=0 の時すでに遠方まで及んでいる事になる。t が変るとこの等振巾面は速度  $\frac{1}{\alpha} = \frac{\mathfrak{V}}{\sin \theta}$  で右の方に動いてゆく。

s=0 の時でも  $\log \sqrt{\frac{(ms)^2+(m\tau+1)^2}{(ms)^2+(m\tau-1)^2}}$  の方は $\tau$  に関せず 0 になる区間はない。(19)も(20)も  $ms\to\infty$  または  $|m\tau\pm 1|\to\infty$  では非常に小さい値になり,主要な値は ms が小さく  $m\tau\pm 1$  が 余り大きくない所にある。 すなわ



**为** 5 区

ち深い所では振巾が小さく,入射波と同形の反射 SV 波の進行している部分から遠くはなれると異形の反射 SV 波は弱くなるが存在する。地表の運動も丁度入射波が入射した時最も優越するがその前後においても徵小な運動が存在する。

もちろん実際の場合波面が無限に広い平面波の形で SV 波が入射するわけではないから上の計算がそのましましまるものではないけれども、波線の屈折により、やしこれに近い状態が起りうると考えられる。そして最も重要な点は全反射された SV 波叉は地表運動と入射 SV 波の波形の間の関係が波形そのものにより左右されるために大変複雑であることと、反射波及び地表運動があたかも分散をうけたように主要部の前後に波動叉は振動をともなうことである。

そしてこの種のことは地表における反射の場合許りでなく相異る媒質間の屈折の際にも起るはずであるが、その方は中々複雑になるに違いないからこのたびは省略した。終りに計算の一部を手伝つていたゞいた関彰氏にお礼いたします。 (1949. V. 28)